

臨床倫理学入門コース 2024 実施報告

京都大学大学院文学研究科応用哲学・倫理学教育研究センター（CAPE）及び京大オリジナル（株）主催による、臨床倫理学に関する教育プログラム（臨床倫理学入門コース）を2025年3月3日と3月27日に開催しました。入門コースの実施は9回目、参加者は全国から49名の受講生と、ファシリテーターと講師15名、助っ人2名、京大オリジナル事務局で実施しました。

1日目はオンライン形式で事例を紹介した後に小グループで意見交換をし、その後3週間の間にオンデマンドによる動画視聴をしてもらい、2日目は、対面とオンラインのハイブリッド形式でライブ授業を実施しました。また、フォローアップ研修として、スピリチュアルペインに関する動画を視聴してもらいました。

臨床倫理学コースの目的は、臨床での倫理的な問題をなんとかしたいという人（臨床倫理コンサルタント、臨床倫理委員会の人など。以下倫理コンサルと略）が、課題に対応するためのさまざまな技能を身につけ、現場で活動してもらうことです。そのためには、倫理コンサルが患者の状況を俯瞰して把握し、「患者はどうあることがよいか」を考え、家族や医療者などのステークホルダーと対話を通じて、解決の方策や方策を達成するための戦術・技術を考えることが必要ですので、講義や演習を通じて学べるように構成しています。

今回のセミナーは、入門コースと称してはありますが、受講を希望する人は臨床倫理の問題に何らかの形で関わっているであろうという予測のもとで、患者の総体的利益は何かを考え、患者や家族、医療者の意見や感情に配慮しながら、ステークホルダーが「そういうことならまあいいか」と思える地点に到達できる技能を身につけることを目的としました。このため、少し難しいのですが、治療の中止・継続が問題となる2つの事例を検討していただくことにしました。

一つ目は、手術は成功したけれども多臓器不全で回復不能な状態となり生命維持治療を受けている男性の家族が、男性の事前指示書を示し、治療継続を望んでいなかったことを理由に中止を求めている事例です。治療が患者本人の利益になっているかどうかや、家族の考えの背景、中止できかねるという担当医の考えや感情などについて検討して方策や戦術を考えることがポイントとなります。各班では、正確な診断をつけることや家族や担当医の気持ちに配慮することなど、多角的な視点からよく検討されておりました。

二つ目は、糖尿病性腎症で維持透析を受けている女性が、透析を中止したいと言い、透析センターの医療者が対応に悩むという事例です。治療の利益をどう判断するか、患者にどう対応するか、などに加えて、スタッフ間の意見がばらばらでコミュニケーションスキルもいまひとつという問題を抱える現場にどのような助言をするのがポイントとなります。各班では、患者が「中止したい」と言う背景を探索したり、患者や医療者の苦しみを把握して対応することなど、多彩な検討がなされており、患者だけでなく医療者も援助の対象として配慮していて、素晴らしいと思いました。

しかし、いずれの事例でも「私は、倫理コンサル（チーム）として、この患者はど

うあることがよいと考えるのか」という視点について班の中でどれくらい検討できているか、また、検討するにあたって各人が理性や想像力を総動員して自分なりの考えを持っていくかが明らかでなく、この点については今後の教育上の課題にしようと思います。

臨床倫理の問題を検討する際は、正確な情報を収集したり、ガイドラインに沿って判断したり、倫理原則に基づいて考えたりすることは重要ですが、これだけでは適切な方策を導くことはできません。問題の要因を探り、解決策を考えるには、まず医療者や倫理コンサル自身が「この患者はどうあることがよいか」を考えられるようであれば話は始まりません。たとえば、二つ目の透析を止めたいと言う女性の事例では、患者の苦しみ、とくにスピリチュアルペインに焦点をあてて、それを和らげるための対策を考える必要があります、これには、援助的コミュニケーションや自己を新たにつくることを促すなどの全人的な対応が必要となります。

私たちは、数年前から、患者やまわりの人を「何か問題を抱えた存在」と位置づけて解決法を探すという問題解決型的なアプローチではなく、「苦しみを抱えた存在」と位置づけて、各人の苦しみを和らげることを通じて問題を解決に導くという対人援助の考え方に基づいたアプローチを採用しているのですが、受講生のみなさんも、合理的な判断だけでなしにステークホルダーの心情に配慮する戦術・技術を考えてくださるようになり、手応えを感じております。また、今回はオプション企画として、昼休み時間を利用して「臨床倫理コンサル自身も“生きる基軸”を立てようじゃありませんか」というワークショップを行いました。自分はどうあるか・どう生きるかを立てて心に持っておくことは、自他のいのちのありようを考えるために必要であるということを感じてもらえていたと思います。

ハイブリッドでのコース実施は1年ぶり4回目でしたが、つつがなく実施することができました。これも、参加してくださった受講生のみなさま、講師やファシリテーターのみなさま、助っ人のみなさま、そして、準備から運営まで細やかな気遣いをしてくださった京大オリジナルのみなさまのおかげと存じます。心より御礼申し上げます。

2025年4月4日

佐藤 恵子